

身延町あけぼの大豆振興協議会 栽培講習会

令和6年度あけぼの大豆の生育概況と 栽培試験の結果について



峡南農務事務所

令和7年6月11日

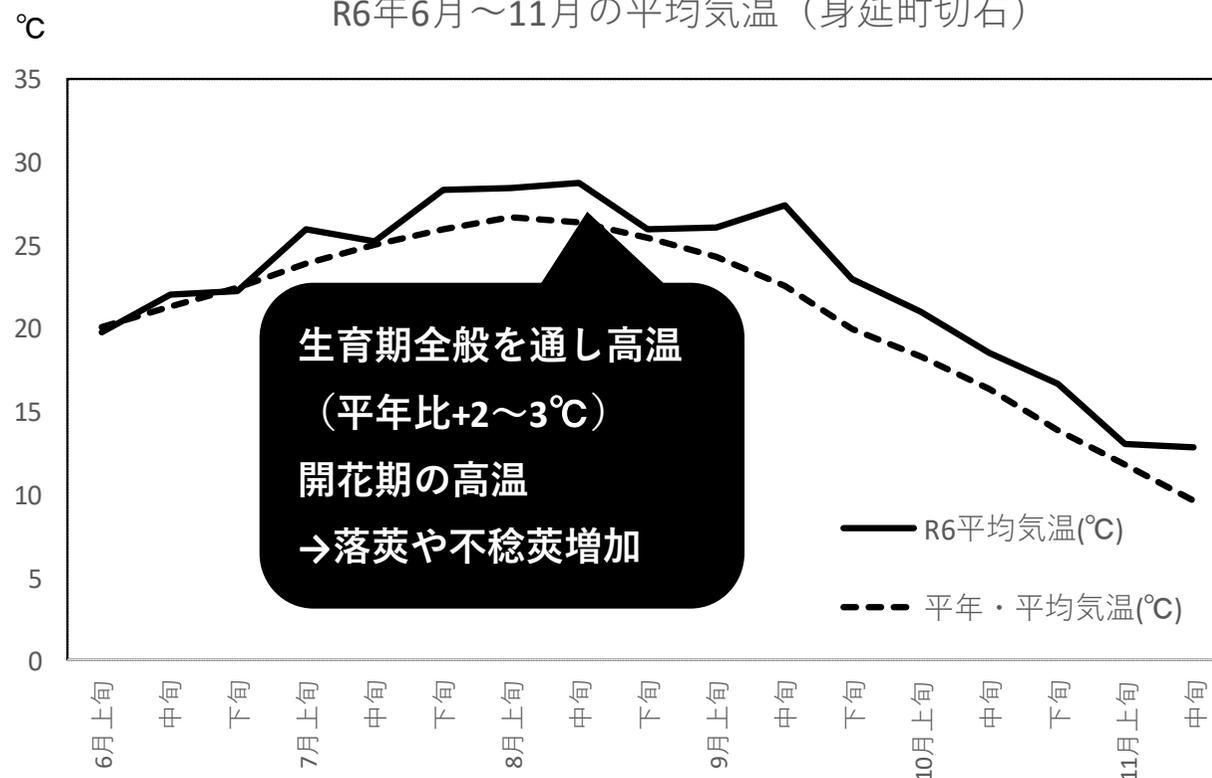
R6の気象（気温）

・ **開花期**の8月
高温
 →花数減少、落花や落莢の増加で結莢数が減少

・ 子実肥大期の9月は
高温で乾燥
 →落莢、不稔莢が増加

・ 生育期全般の**高温**
 →**ハダニ類**の発生に影響

R6年6月～11月の平均気温（身延町切石）



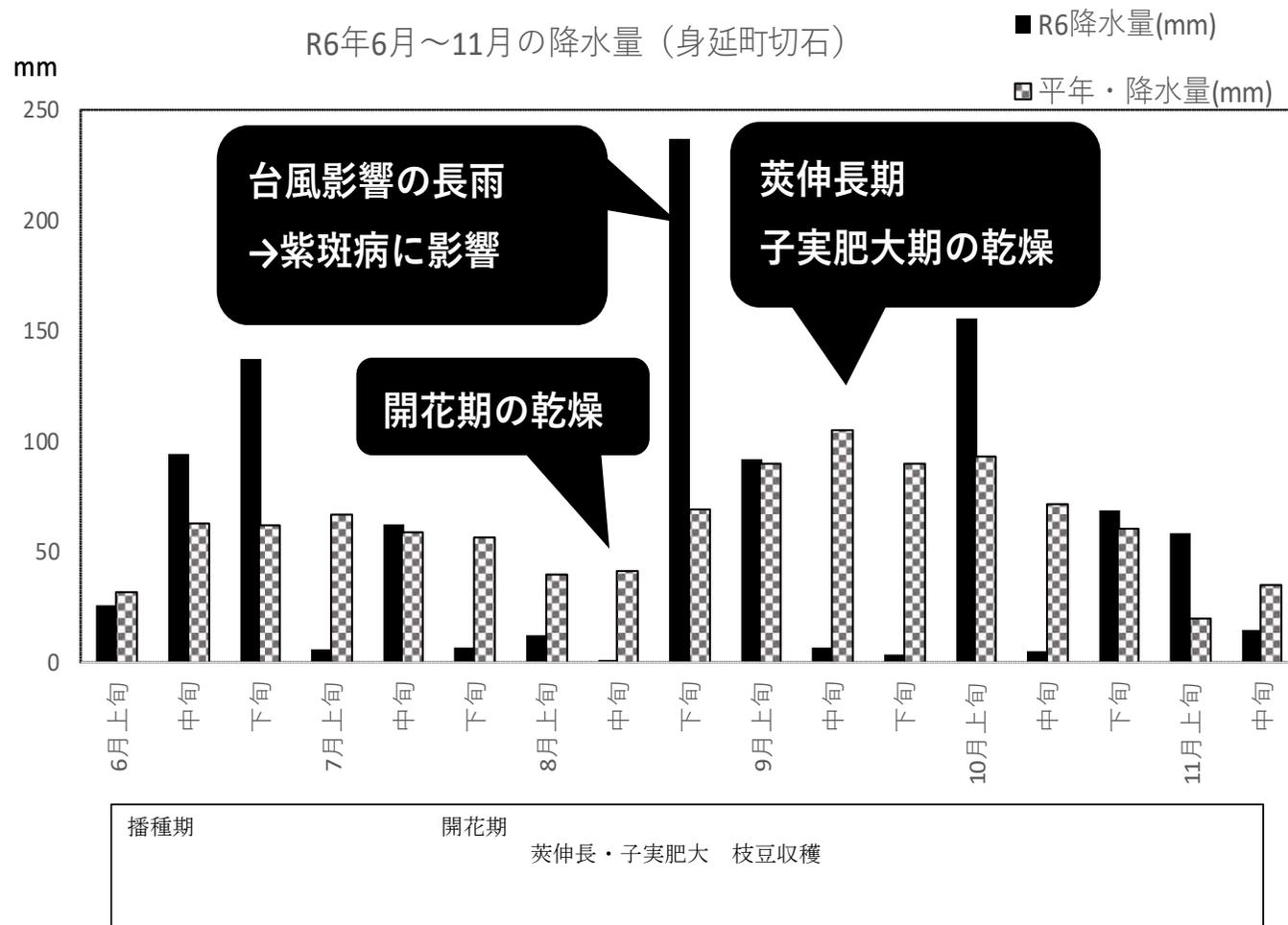
月	日平均(平年差)	日最高平均	日最低
7月	26.5℃(+1.5℃)	32.5℃	22.4℃
8月	27.6℃(+1.5℃)	33.9℃	23.7℃
9月	25.4℃(+3.2℃)	31.3℃	21.6℃

R6の気象（降水）

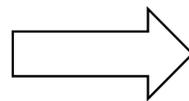
・開花期の8月上中旬
 少雨・乾燥
 →花数減少、落花や落莢の増加で結莢数が減少

・開花期の8月下旬
 降雨（**平年343%**）
 →**紫斑病**の発生に影響

・子実肥大期の9月は少雨
 高温で**乾燥**
 →落莢、不稔莢が増加



高温・乾燥対策



かん水の実施

開花直前～開花40日頃までは**最重要**

- ・ 時期：7月下旬（梅雨明け後）が目安（土壌の乾燥程度を確認）
→ **8月上旬～9月上中旬頃**が特に大事
- ・ 梅雨明け～収穫期まで、高温晴天が7日以上続く時は、うね間にかん水を行う
（株間や畦間が乾き、葉がしおれ内側に巻くようになるとピンチ）
- ・ 根が水に浸かる時間が長いと湿害となる（水口に注意が必要）



＜参考＞
かん水の目安
左：葉の裏面が目立つ 右：直立した小葉

病虫害防除

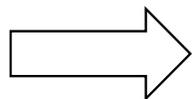


開花期～子実伸長期は最重要ポイント

- ・ 開花期から子実肥大期にかけて、3～4回薬剤散布（7～10日間隔）
- ・ 莢伸長期から子実肥大期には、殺虫剤と紫斑病の殺菌剤を混ぜて散布

防除時期	薬剤名	対象病虫害		使用基準		
				倍率	収穫前日数	総使用回数
①開花終わり (8/20頃)	スミチオン乳剤 ※1	カメムシ類、マメシクイガ等		1,000倍	収穫21日前	4回以内
②子実肥大期 (8/30頃)	ゲッター水和剤 ※2	紫斑病	だいず	1,000倍	収穫14日前	3回以内
			えだまめ	1,500倍	収穫7日前	
	トレボン乳剤	カメムシ類、マメシクイガ等		1,000倍	収穫14日前	2回以内
③子実伸長期 (9/10頃)	ゲッター水和剤 ※2	紫斑病	だいず	1,000倍	収穫14日前	3回以内
			えだまめ	1,500倍	収穫7日前	
	トレボン乳剤	カメムシ類、マメシクイガ等		1,000倍	収穫14日前	2回以内
秋が高温の 場合 (9/20頃～)	アニキ乳剤	ハスモンヨウ		2～3,000倍	収穫前日	3回以内
	プレバソフロアブル5	ハスモンヨウ、 マメシクイガ等	だいず	4,000倍	収穫7日前	2回以内
			えだまめ		収穫3日前	3回以内
グレーシア乳剤	ハスモンヨウ、 マメシクイガ等	だいず	2～3,000倍	収穫14日前	2回以内	
		えだまめ		収穫前日	2回以内	

紫斑病



薬剤防除（開花20～40日後頃が防除適期）
雨前に散布する

<伝染源・対策>

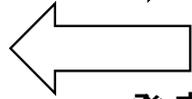
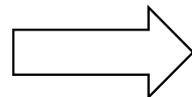
- ・罹病種子や被害残さで菌糸の状態越冬（1次伝染源）
- ・1次伝染源から子葉などに感染する。発生した病斑から、葉、莢などに感染。菌糸は、莢が黄化する頃から、急速に内側に進展し、種子に感染する。

→ 健全種子を用いる 種子消毒 罹病した残渣の除去
薬剤防除（前ページ参照）

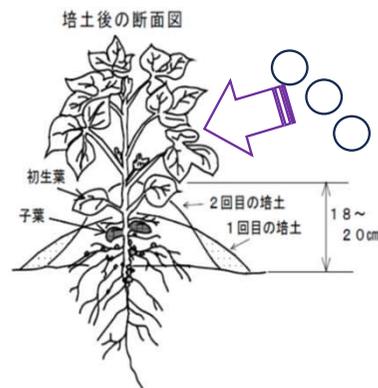
◆トップジンM及びアミスター20フロアブルは他県で耐性菌の発生あり→使用は控える



越冬
（1次伝染源）



発病



胞子が飛散、感染

<被害の様子>子実、葉、莢に紫黒色の斑点

ハダニ類



発見したら、薬剤防除（葉裏にかかると散布）
早期発見・対処が重要

<特徴・対策>

- ・葉を加害するダニ：カンザワハダニ、ナミハダニなど
- ・加害により、葉にかすり状の白点や茶色の斑点を生じる。
被害が進むと葉全体が黄色化。→ 薬剤防除

ハダニ類の防除薬剤(たいず、えだまめ)

薬剤名	対象病害虫		使用基準			備考
			倍率	収穫前日数	総使用回数	
コロマイト乳剤	ハダニ類	たいず	1,500倍	収穫 7日前	2回以内	6
		えだまめ		収穫 前日		
ニッソラン水和剤	ハダニ類	たいず	3,000倍	収穫 7日前	2回以内	10A
		えだまめ		収穫 21日前		
カスケード乳剤	ハダニ類(※)	たいず	4,000倍	収穫 7日前	2回以内	15
		えだまめ(※)		収穫 前日		



防除を複数回行う場合は、
薬剤抵抗性の発達を防ぐ
ため、同一薬剤の連続散布
は行わない。

(※) エダマメは、作目登録はあるがハダニ類の登録はない（農薬の使用は可能です）

備考欄には、IRACコードを記載。農薬の使用にあたっては、最新の登録情報を参照し、適正に使用

ハスモンヨトウ



薬剤散布など防除対策
早期発見、早期防除

<生態・対策>

- ・卵を大豆の葉裏にかたまりで産みつける→見つけたら捕殺
- ・ふ化後、群せいして摂食するため、食害を受けた葉が白くみえる(白変葉)
→ほ場に持ち出し処分する
- ・3齢幼虫期以降は分散して食害。葉だけでなく、莢・子実も加害。
- ・寒さには弱い
- ・薬剤防除は④ページ参照 (大豆と枝豆で登録が違うものがあるので注意)



R 6 試験結果について 1 中耕培土

○中耕・培土の効果

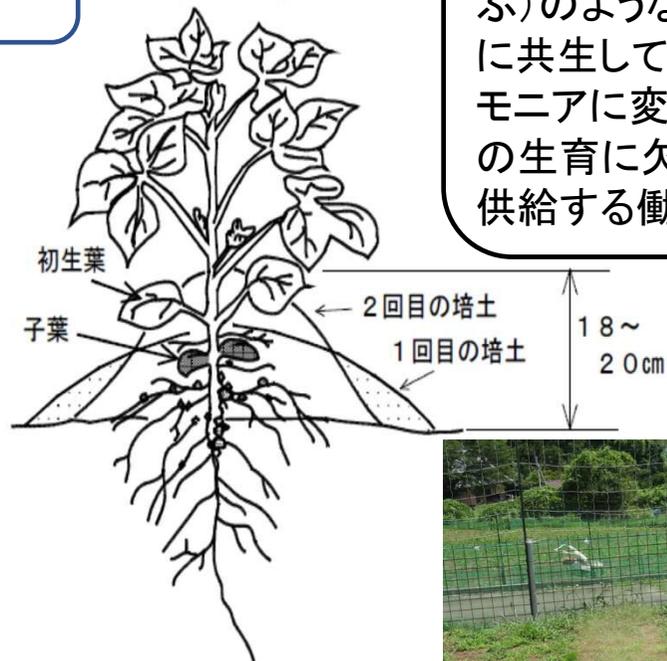
- 倒伏軽減
- 雑草抑制
- 通気性、排水改善
- 新根、根粒菌の生育促進

(従来の実施時期)

1回目 本葉3～4枚 6月下～7月中旬

2回目 本葉5～6枚 7月中～7月下旬

培土後の断面図



根粒菌(こんりゅうきん)とは?

大豆などの根についている瘤(こぶ)のようなもの。マメ科植物の根に共生して、大気中の窒素をアンモニアに変え(=窒素固定)、植物の生育に欠かせない窒素を大豆に供給する働きをする土壌微生物。



- ⇒
- 従来より1回目を**早く実施** → **雑草管理の省力化**
 - 中耕培土の回数による収量への影響を調査

○方法

- ・ 1 回目の中耕培土 **本葉 1 ~ 2 枚** (6 月下旬~) → **早期中耕培土**
- ・ 2 回目の中耕培土 **本葉 5 ~ 6 枚** (7 月中下旬)

○結果

- ・ 中耕培土 (2 回) では、中耕培土 (0 回) と比較し、**莢数が増加** (約 2 倍)。
- ・ 除草にかかる時間は、早期中耕培土により、**50%削減**。

表 早期中耕培土があげぼの大豆(えだまめ)の収量や作業時間に及ぼす影響(2024)

試験区	主茎長 (cm/株)	分枝数 (本/株)	可販莢数 ^z (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販収量 ^y (kg/10a)	除草作業時間 ^x (分/a)	除草時間の削減率(%) ^w
早期中耕培土	53.4	7.4	233	603	1508	17.4	50
中耕培土1回	57.0	6.2	115	343	858	26.1	75
中耕培土0回	57.0	6.2	129	420	1050	34.8	-

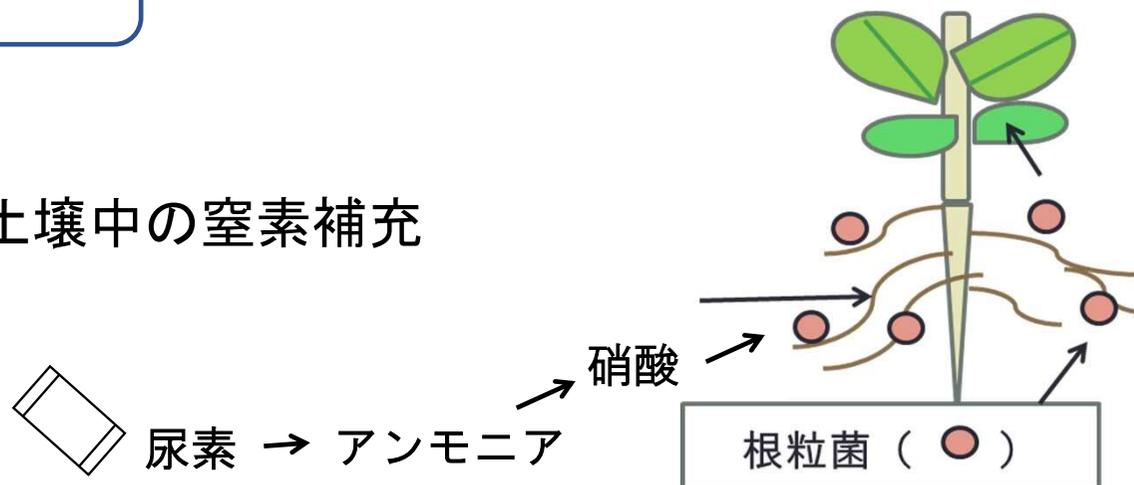


^z)未熟莢・病虫害莢を除いた販売可能な莢

R 6 試験結果について 2 追肥

○追肥の効果

- ・ 開花～子実肥大期にかけて減少する土壌中の窒素補充
- ・ 葉色向上、根粒菌の活性化



<使用する資材>

①LPコート70

- ・ 窒素成分のみの被覆肥料。施肥後約70日間にわたって窒素が徐々に溶け出す。

②尿素

- ・ 窒素含有量が多い。コストも低い。

① LPコート70

○方法

- ・ 2回目の中耕培土前に LPコート70 畝間に施用 (量: 1袋10kg/10a)

○結果

<エダマメ・大豆>

- ・ 3割程度収量向上



表1 追肥(LPコート70)が「あけぼの大豆(えだまめ)」の生育や収量に及ぼす影響(2024)

試験区	主茎長 (cm/株)	可販莢数 ^z (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販収量 ^y (kg/10a)
LPコート70	56.8	116	415	1038
対照	51.2	107	319	798

表2 追肥(LPコート70)が「あけぼの大豆」の収量や品質に及ぼす影響(2024)

試験区	子実重 (g/株)	百粒重 (g)	換算子実重 ^z (kg/10a)	健全粒率 (%)	病虫害粒 ^y (%)	裂皮粒率 (%)	しわ粒率 (%)
LPコート70	190	57.2	475.0	48.0	13.0	34.0	0.5
対照	147	54.5	367.5	26.5	10.0	32.5	15.0

②尿素（尿素46%を使用）

○方法

- ・開花期～子実肥大期に葉面散布（例 水100Lに尿素1.5kgを溶かす）
開花期～子実肥大期の10日毎に1回（計3回）。薬剤散布時に混用。

○結果

<エダマメ>

- ・3割程度収量向上

<大豆>

- ・R6は収量向上が認められず。

表3 追肥(尿素)が「あけぼの大豆(えだまめ)」の生育や収量に及ぼす影響(2024)

試験区	主茎長 (cm/株)	可販莢数 ^z (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販収量 ^y (kg/10a)
尿素	54.0	121	412	1030
対照	51.2	107	319	798



①LPコート もしくは ②尿素 のいずれか実施
収量向上効果が期待される

今年の栽培について

◇気象庁の3ヶ月予報（5月20日付け）

・6月 気温は、高い確率60%。 7月、8月も高い確率50%。

R5、R6 に続き、 暑くなりそう？

→灌水できるように準備を

熱中症対策も万全に

◇栽培管理

・中耕培土は2回行う。

・病虫害防除 病気→予防散布 虫→発生初期に防除

◇播種時期

・6月いっぱい終わらせる。7月だと遅い？

